



2025 年度日本語教育学会支部集会予稿集

【中国支部】2026(令和8)年2月22日

／オンライン開催

2025 年度第 2 回支部集会【中国支部】

主催：公益社団法人日本語教育学会

日時：2026 年 2 月 22 日（日） 16:30～19:05（受付開始 16:00～）

会場：オンライン（Zoom）

※ 問合せ先：公益社団法人日本語教育学会 支部活動委員会

e-mail: shibu@attマークnkg.or.jp TEL: 03-3262-4291（平日 9～18 時のみ）

◆支部集会日程◆

16:00	受付開始
16:30-16:35	開会あいさつ
16:35-16:55	口頭発表(1 件)
17:00-19:00	講演「生成 AI で深まる言語教育」 講師：李在鎬氏（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）
19:00-19:05	閉会あいさつ

開会あいさつ

口頭発表

※本発表は査読審査を経た学会発表です。詳細は3ページ～をご覧ください。

「トルクメン人大学生の外国語習得分析 — 複言語環境でのロシア語を対象として — 」

Dadayeva Maysa（ダダエヴァ マイサ、筑波大学大学院生）

講演

題目：「生成 AI で深まる言語教育」

講師：李在鎬氏（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）

講演趣旨

近年、生成 AI の加速的な進展が、言語の学習にも教育にも多大なる影響をもたらしています。教育現場では AI 活用の可能性を探りながら、一方で教師自身が AI とどのような距離感で向き合うべきかといった課題に、明確な答を見いだせないまま手探りの状態が続いてい



ます。

講師の李在鎬氏は、AIと言語教育の領域で非常に早い段階から先鋭的な研究を進めてこられた第一人者です。本講演では、生成AIは学習者の言語使用を可視化し、個別最適化された学習・フィードバックを可能にする一方で、依存や批判的思考の低下も懸念されることを踏まえながら、生成AIが言語教育をいかに深化させ得るか、その可能性と課題を検討したいと思います。

本講演が、言語教育に関わる参加者にとって、日々の授業実践で感じている悩みや迷いを整理し、「AIとどう共生するか」を深く考える機会となることを期待しています。

閉会あいさつ



トルクメン人大学生の外国語習得分析

—複言語環境でのロシア語を対象として—

Dadayeva Maysa (筑波大学大学院生)

1. 研究の背景と目的

トルクメン語はトルクメニスタン憲法第 1 章第 21 条¹において、トルクメニスタンの国語と定められており、すべての国民には、母語を使用する権利が保障されている。かつてソ連領であったトルクメニスタンではロシア語が公用語として広く使用されていたが、1991 年の独立を契機に、中央アジアで最も早くラテン文字に移行する²決定が下された。1992 年にはトルクメン語が国家の主要な言語として明確に位置付けられ、憲法にはロシア語に関する記述は含まれていない。(TÜRKOLOGIYA-2018,p109)。

また、教育の教材やメディアもトルクメン語で整備され国民生活のあらゆる面でトルクメン語の使用が奨励されるようになった。これにより、トルクメン語はトルクメニスタンにおいて文化および国家的なアイデンティティの象徴として社会の中で重要な役割を担う言語となった。

ロシアの「Central Asia Institute³」大学のウェブサイトによれば、トルクメニスタンでは 1996 年以降ロシア語の社会的地位が低下し、ロシア語話者の割合も急激に減少したとされる。同報告では、ロシア語を流暢に使用できる話者は主としてソ連時代後期に教育を受けた世代に属すると推定されている。ソ連時代に教育を受けた世代のロシア語習得は当然の帰結として理解されるが、ソ連解体後に生まれた若年層にもロシア語の高度な運用能力を有する話者が存在する事実だが、本研究では言語習得研究の観点から研究課題として、ソ連解体後の時代において、どのような環境でロシア語が習得されたのかに焦点を当てる。筆者と同様の言語習得経験を有する話者の存在が確認されており、彼らのロシア語習得過程と重要な要因を分析することにより、外

¹ ombudsman.gov.tm/doc/Turkmenistanyn_Konstitusiyasy.pdf

²The modern standardized language was developed in the 1920s from the Teke and Yomut dialects as a result of Soviet interest in creating a national literary language. The tribal dialects, which were always mutually comprehensible, now share a standardized written language and grammar. The Türkmen and other Turks, who had used an Arabic-based script for centuries, replaced it with an "international" Latin-based script in 1929. In 1940, when Soviet policy shifted again, the Türkmen were assigned a Cyrillic alphabet. The Türkmen chose to adopt a Latin-based script similar to the one they had used earlier.

³ Institute for Central Asia Studies, [Что известно о русском языке в Туркменистане?/Институт исследований Центральной Азии](#)

国語学習における本質的要素の解明が可能と考えられる。本研究では、これらの要素を特定し、外国語教育への応用可能性を検討する。

言語類型論的観点からも、トルクメン語とロシア語は異なる特徴を有している。ロシア語はスラヴ語族の東部に属する屈折語であり、動詞や名詞の文法的変化を特徴とする。一方、トルクメン語はテュルク諸語南西グループ（オグズ語群）に属する膠着語であり、助詞や接尾辞による文法関係の表示を特徴とする。このような構造的差異にもかかわらず、ロシア語の流暢な運用が可能なトルクメン語話者の存在は、外国語習得メカニズムの解明において興味深い事例であると言える。

ロシア語の習得状況について、本研究ではアンケート調査を実施し、ロシア語を習得している人とそうでない人を明確に区別する。その上で、ロシア語ができるトルクメン人の外国語学習者を対象に、彼らのロシア語能力のレベルやその要因について考察する。その中でも特にロシア語での発話が限られた環境で習得に成功した事例に焦点を当て、外国語学習の成功要因や効果的な勉強法を探求する実例研究とする。ロシア語ができるトルクメン人とロシア語ができないトルクメン人に焦点を当て、ロシア語習得の有無に関する要因を明らかにする。言語環境や学習方法など、様々な要素を考慮し、学習者のロシア語能力の巧拙の理由を分析する。ロシア語を習得した人たちに焦点を当て、第2言語教育の特徴をまとめる。

2. 先行研究

トルクメニスタンにおけるロシア語の実態に関する先行研究は極めて限られており、自国政府統計や国際機関の報告においても詳細なデータが必ずしも整備されていない。このため、本研究ではまず、同じく旧ソ連構成国であり、類似した歴史的背景を共有する中央アジア諸国の言語政策・言語状況に着目した。

カザフスタンに関する報告によれば、独立後もロシア語が依然として広範に用いられており、対人的コミュニケーションの約75%がロシア語、約20%がカザフ語で行われているとされる⁴。また、カザフスタンではカザフ語とロシア語の双方に公的地位が与えられている一方で、トルクメニスタンおよびウズベキスタンはロシア語に公式な地位を与えない事実上の単一言語政策を採用していることが指摘されている。教育政策の観点からも、ウズベキスタンやタジキスタンが複数言語を教育媒体とする多言語志向を示し、カザフスタンではカザフ語校とロシア語校が併存するのに対し、トルクメニスタンでは国語であるトルクメン語のみが国立学校の教授言語として用いられている⁵。しかし、母国であるトルクメニスタンの事情を見ると、初等教育から中

⁴ Language Policies in Kazakhstan: Balancing Multilingualism and National Identity. Ministry of Foreign Affairs of Thailand, [image.mfa.go.th/mfa/0/iyOJNVBddx/E-book/Language Policies in Kazakhstan Balancing Multilingualism and National Identity.pdf](https://image.mfa.go.th/mfa/0/iyOJNVBddx/E-book/Language%20Policies%20in%20Kazakhstan%20Balancing%20Multilingualism%20and%20National%20Identity.pdf)

⁵ Dietrich, A. (2019). Language policy in Central Asia. Central Asia Forum, [Language policy in Central Asia](#)

等学校（小学校～高校）段階においては、教授言語としてトルクメン語を選択するか、ロシア語を選択するかを制度上選べる教育枠組みが存在している。一方で、高等教育段階においては、そのような教授言語の選択肢は認められていない。

このように、中央アジア諸国では、ロシア語の位置づけが大きく異なるため、トルクメン人のロシア語運用力については、トルクメニスタン固有の状況を踏まえて検討する必要がある。

3. 調査内容

本研究では、量的データと質的データの双方を用いる混合研究法を採用した。量的分析では、調査対象者のロシア語能力の実態と、その習得状況の全体的な傾向を把握することを目的とし、質的分析では特定の条件を満たす上級学習者の学習経験を精査することで、高度なロシア語能力に到達した要因を多角的に検討することを目的とした。

量的調査として、オグズ・ハン工科大学に在籍する30歳未満のトルクメン人大学生103名を対象に、選択式（単一回答・複数回答）の質問項目から構成されるアンケート調査を実施した。アンケートの主な目的は、トルクメン人大学生の中でロシア語を運用できる学習者とそうでない学習者を区別し、その割合および関連する背景要因を把握することである。アンケート実施に先立ち、全対象者に対してロシア語能力の測定テストを行い、その指標としてオンラインの「MGU-Russian」テスト⁶を用いて、各自のロシア語能力レベルを客観的に分類した。

質的調査では、アンケートおよびロシア語能力テストの結果に基づき、次の条件をすべて満たす4名を詳細分析の対象者として選定した。第1に、日常生活においてロシア語による発話機会がほとんどない環境で育ち、現在もロシア語を日常的な会話手段として用いていないこと。第2に、ロシア語の母語話者が多数居住する国への中長期滞在経験を有さないこと。第3に、ロシア語能力テストおよび自己報告の双方から、ロシア語運用能力が上級レベルに相当すると判断されることである。

4. 調査結果

オンラインテストによるロシア語能力の分析では、全体の42.7%が「Elementary」、12.6%が「Basic」、18.4%が「Advanced」、26.2%が「Fluent」と判定された。対象者103名中97名はロシア語系学校の出身ではなく、そのうち86名は家庭内でロシア語を使用しておらず、さらに74名は友人との会話でもロシア語をほとんど用いていなかった。このRTN-T（ロシア語系学校非卒・トルクメン人・家庭と友人関係で主にトルクメン語使用）74名のうち、56.7%が「Elementary」、14.8%が「Basic」、14.8%が「Advanced」、13.5%が「Fluent」であった。ロシア語系学校を卒業していないにもかかわらず「Fluent」「Advanced」レベルに達した学習者は、子どもの頃から映画・アニメ・テレビなどの視聴覚メディアを通じてロシア語に接する割合が高い一方、「Basic」「Elementary」レベルの学習者はメディア視聴時に他言語も併

⁶ [Find out your Russian language skills - pass online test](#)

用する傾向が見られた。

質的調査では、量的結果に基づき、ロシア語による発話機会がほとんどないにもかかわらず高い熟達度に達した4名を対象にインタビューを実施した。オンラインテストでは4技能を十分に測定できないため、アンケートとインタビューに先立ちCEFR自己評価票を記入してもらったところ、理解技能は全員がC1～C2、口頭でのやり取りはB2が1名・C1が3名、口頭表現はB2が2名・C1が2名、書く技能はB2が1名・C1が3名という結果であり、4名とも総じて「Fluent」レベルに相当することが確認された。インタビュー項目の設計にあたっては、岩本（2010）が示した学習継続要因「学習支援者」「自己効力感」「成功体験」「自律学習」に着目するとともに、Krashen（1985）のインプット仮説を手がかりに、学習者がどのような理解可能なインプットにどのように接触してきたかを尋ねた。

その結果、第2言語教育に関する知見として、発話機会や特別な家庭内支援がほとんどない状況でも、視聴覚メディアや読書を通じたインプットを中心に高いロシア語能力に到達し得ることが示唆された。対象者4名はいずれもロシア語コースや家庭教師による指導経験を持たず、子どもの頃から明確な学習目標も持たなかったが、オンラインテストとCEFR自己評価の両方から流暢なレベルのロシア語運用が確認された。学習意欲の点では、2名は今後も読書や映画・テレビ視聴を通じてロシア語能力の向上を図りたいと答え、残る2名は現時点では強い向上意欲はないものの、必要になれば同様に本や映像メディアを用いて学ぶと回答しており、いずれもインプット中心の学習方法を最も効果的な手段として認識していることがうかがえた。これらの結果は、学習者の興味や生活様式に合った形で豊富なインプットを提供することが、言語習得において極めて有効であることを示している。

5. まとめと考察

本研究では、オグズ・ハン工科大学のトルクメン人大学生103名を対象にアンケートとオンラインテストを行い、そのうち4名にインタビュー調査を実施した。量的分析の結果、トルクメン語が主でロシア語が日常的に使用されない環境で育った74名のうち、「Fluent」または「Advanced」レベルに達していたのは21名であり、多くの学習者は10年以上ロシア語教育を受けているにもかかわらず習得度が低いことが明らかになった。

一方で家庭内や友人との会話でロシア語をほとんど用いないにも関わらず高いロシア語能力を有する少数の学習者が存在し、その多くが映画・アニメ・テレビなどの視聴覚メディアを通じてロシア語に継続的に接していたことが質的調査から示された。4名のインタビュー対象者はいずれもロシア語コースや家庭教師による指導経験を持たず、明確な学習目標もないまま、自分の好きな映像作品や本を楽しむ過程で大量のインプットを受けており、オンラインテストとCEFR自己評価の結果から、理解技能はC1～C2、産出技能も概ねB2～C1の「流暢」レベルに達していた。

アンケートでは、「現在のロシア語能力の向上に最も役立った要因」として学校教育や教師の指導を挙げた者は4.9%にとどまり、59.3%がメディア視聴や読書などインプット中心の経験

を挙げていた。この結果は、理解可能なインプットが第2言語習得の中核的役割を果たすとする Krashen の仮説や、情意フィルターが低いリラックスした環境での学習が効果的であるとする議論と整合的であり、強制や不安を伴わない自発的なインプット経験が高い熟達度に結びつき得ることを示唆している。

また、読書による語彙習得には高い既知語率が必要とされることから、本研究の対象者にとっては初期段階では視聴覚メディアの方がアクセスしやすく効果的なインプット源となっていた可能性が高い。ロシア語を日常的に使用する環境にないにもかかわらず流暢さに達した学習者の存在は、従来の文法中心・アウトプット中心の教授法に対して、インプット重視のアプローチの有効性を再確認させるものである。

本研究の独自性は、幼稚園から高校までロシア語が必修であるにもかかわらずロシア語能力に大きな格差がみられるトルクメニスタンにおいて、特にロシア語発話環境に乏しい地域で流暢さに達した学習者の習得過程と成功要因を明らかにした点にある。これらの知見は、トルクメニスタンの言語環境の理解を深めるだけでなく、日本語教育においても、映画・アニメ・ドラマ・オンライン動画などを活用したインプット重視の学習環境の整備や、アウトプット機会が限られた学習者への支援方略を検討するうえで重要な示唆を与える。

本研究で示されたように、発話機会が乏しい状況であっても、視聴覚メディアや読書を通じた豊富なインプットによって高い熟達度に到達し得るという結果は、日本語教育に対しても大きな含意を持つ。特に、日本語使用環境が限定される海外学習者に対して、これらのメディアを体系的に組み込んだインプット重視型カリキュラムを設計することで、教室外での日本語接触を増やし、運用能力の向上を促進できる可能性がある。また、アウトプット機会を十分に確保しにくい場合でも、学習者の興味やライフスタイルに即した日本語インプットを継続的に提供することは、学習継続と熟達度向上の双方を支える有効な方略となり得る。

参考文献

岩本尚希(2010)「外国語学習者の学習継続要因に関する—考察—言語学習ヒストリーから—」桜美林言語教育論叢 6,29-43

Christy Lao and Stephen Krashen (2014) Language Acquisition without Speaking and without Study. *Journal of Research of Bilingual Education Research and Instruction* 16(1): 215-221.

Garibova, J. (2018) *Sovyet Sonrası Dönemde Türk*. p109

Stephen D. Krashen (2003) 『Explorations in Language Acquisition and Use』

Stephen D. Krashen (2017) *The Case for Comprehensible Input*

**公益社団法人日本語教育学会
支部活動委員会**

委員長：塩井実香

副委員長：稲田朋晃・佐藤綾・鈴木崇夫

犬飼康弘・梶原彩子・神山英子

木林理恵・草木美智子・久保比呂美

久保田文子・小柴裕子・近藤弘

高橋亜紀子・埴田美有紀・田中真寿美

中園博美・堀田智子・松本美紀

藪崎淳子・渡辺裕美

審査・運営協力員

荒井智子・市嶋典子・大久保雅子

荻原稚佳子・川上尚恵・河住有希子

河野俊之・金孝卿・近藤行人

澤邊裕子・柴田あづさ・砂川裕一

牲川波都季・高梨信乃・建石始

トンプソン美恵子・中上亜樹・西谷まり

野田尚史・橋本ゆかり・蓮沼昭子

春口淳一・藤森弘子・藤原智栄美

松尾慎・三輪聖・森篤嗣

山田智久・吉野文

**公益社団法人日本語教育学会
2025年度第2回支部集会【中国支部】予稿集**

発行 2026年2月22日

発行者 公益社団法人日本語教育学会

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F

TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp

URL <https://www.nkg.or.jp>

